

第二期 第九十三号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024. 04. 10 定有堂書店 発行

焚き火から埋み火へ

「本のある場所」日記 二〇二四年三月

主客二元論の信仰から懷疑へ (続)

遅い理由は分かっている

ほんやづくり日記

本を作る側から (13)

汽水のほとりから (37)

そしてカブ主になる

タイトルの妙、妙なタイトル (前)

鳥取あれこれ その九十二

八代日記 (四十七)

「身の文」を考え始めてしまった人

春のあんこ

ご案内

…… 編集後記

奈良 敏行

南陀楼綾繁

岩田 直樹

高木 善祥

鳥居 貴彦

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

トラメリア



## 焚き火から埋み火へ

奈良 敏行

(定有堂 主人)



三月五日に『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』(作品社)が刊行された。三砂慶明さんの仕事だ。十六日(土)に角田光代さんの書評が「心揺さぶられる「体温」がある書店」という見出しで毎日新聞に出た。十七日(日)には南陀楼綾繁さんの書評が「小さな店のこだわり」という見出しで産経新聞に掲載された。

五日の刊行日にはB&Bの内沼晋太郎さんと三砂さんのトークイベントがYouTubeで配信された。十日(日)には福岡のブックスキューブリックの大井実さんと三砂さんのトークイベントがありオンラインで参加した。十七日(日)には午後には紀伊國屋書店新宿本店の星真一店長、夜に往来堂で箕入健志さんと三砂さんとのトークがあった。画面越しに懐かしい人たちに出会えた。

内沼さんは二〇二一年に『ブルータス』の「本屋好き特集」で定有堂を大きく紹介してくれた人だ。「本屋は人だ」というキーワードで、本好き本屋好きの人たちの中に定有堂の

存在を印象深いものにした。聖地伝説まで生まれた。十三年経って「ブックセラーズ・ブックセラ―」という言葉で振り返ってくれた。ミュージシャンに愛されるミュージシャンを「ミュージシャンズ・ミュージシャン」というそうだ。

また、「独立系書店」という言葉があるが奈良さんは文字通り「ひとりで立っている」という意味での「独立」だ、孤高の本屋なのだと語った。スタンドアロンなのだ。つながりがない。素人で始めたので書店の「技術」や「駆け引き」などのしきたりにとらわれていない。本が好き、本屋が好きな人が好きという「初発衝動」(闘争心)があるだけだ。当然店のあり方はブリコラージュ的になる。自分で考え、自分で決める。そこに独特の「ことば」が生まれる。「ことば」をくれる人だ。これが十三年目の内沼さんの総括だった。

二十四日(日)には県立鳥取西高で「なぜ人生には本が必要なのか？」と銘打って、角田光代さんとの対話があった。三砂さんのモデレートだ。『方舟を燃やす』の刊行記念でもあった。鳥取西高が作中に登場するのだ。「どむか」の歸山健一さんや作品社の青木誠也さんも会場参加していた。わたしは角田さんの『さがしもの』(新潮文庫)を生徒のみなさんに勧めた。読書の深みへと誘う絶妙の一冊だと思った。

翌々日の二十六日には『町の本屋』という物語』の重版が確定した。刊行から二十二日目、三砂さんの奔走の成果だ。

二十七日(水)は朝日新聞の木元健二さんとニューオータニの十三階フウンジで昼食会をした。三時間ほど、この本について語り合った。この本が伝えようとするのは、ワニイシューという何だろうね、というのが話題だった。わたしは三砂さんが好んで使う「焚き火」でしようかと答えた。角田さんはこの本を表して「温もり」のある世界だといった。「焚き火」と「温もり」、人と人との肌寄せ合うところに生まれるものだ。木元さんは、ぼくは「埋(うず)み火」という言葉が好きだといった。炬や火鉢などの灰にうずめた炭火だ。これは木元さん流のノンフィクションの核心だ。「埋み火」を秘めた人を探して作品にしていくなのだ。この本に「埋み火」を見出してくれたのはうれしかった。

『町の本屋』は遅れてきた人たちのための書物だ。四十三年の長きにわたる本と本屋の記録なのだ。もしこの本が遅れてくる人たちに発見されなければ何の意味もない。定有堂の光芒にぎりぎり間に合った三砂さんが、次の世代に残してくれた本だ。間に合った人たちにとっては定有堂は「温もり」のある「焚き火」だった。木元さんは「それは終わったことだ」という。しかし次の世代に届けようとする、リリースしようとする意志が強固に感じられる。それはいつか炎を蘇らせる「埋み火」だという。「伝える価値」のある何事かだとも。

定有堂は四月十八日で店を閉ざしてちょうど一年になる。木元さんのこの「埋み火」の話は「著者に会いたい」というコーナーで、二日遅れて二十日(土)の書評の片隅に掲載される予定だ。

二十六日(火)には、会場を県民文化会館に変えた最初の「読む会」があった。十五人の参加だった。テキストは山内志朗『中世哲学入門』ちくま新書。「存在の「義性」や「馬性は馬性以外の何ものでもない」という有名な言葉が俎上に乗った。難解でまったく分からなかった。後日講師の岩田直樹さんはマレンボンの『中世哲学』(岩波書店)の第六章に「馬性」の分かりやすい論述があるよと補講してくれた。「馬性」に「偶有性」からませて考えるものだった。十五人の集まるその場所にはたしかに「埋み火」の熱量が生まれつつあった。

2024.03.28

奈良敏行 十三砂慶明

『本屋という物語—定有堂書店の43年』 作品社 2024

角田光代 『方舟を燃やす』 新潮社 2024

山内志朗 『中世哲学入門』 ちくま新書 2023

奈良敏行 十三砂慶明編

『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』

作品社 本体2200円 46判上製

ISBN978-4-86793-013-7

発行 2024.2



# 「本のある場所」日記 二〇二四年三月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

3月16日

小川町の東京古書会館で、カラサキ・アユミ『古本乙女母になる。』（皓星社）刊行記念トークイベントへ。カラサキさんは六年前に『古本乙女の日々是口実』（皓星社）を出された際に知り合い、香川や広島で一緒にトークをやった。旧著はマンガで、新著は文章だが、まったく両者にズレがない。見事な画文一致だ。カラサキさんの人柄が絵や文章に直結していて、ウソがないからだろう。

「古本屋ツアー・イン・ジャパン」の小山力也さんが聴き手になってのトークでは、カラサキさんが古ツアさんのリードを振り切り、さつき買った古本のことを熱を込めて語って猟書の話語りも羨ましい。いまの私はそんなに情熱を持って本屋さんから「最近即売会に来てないでしょ」と責められ、なぜか悪い気になって言い訳をしてみました。打ち上げと二次会では、古本屋さんと古本好きが二十名近く集まり、

盛り上がる。こんなに純粋に楽しく古本話したのは久しぶりだという気がする。

3月17日

千駄木の〈往来堂書店〉で、奈良敏行（著）、三砂慶明（編）『町の本屋という物語 定有堂書店の6年』（作品社）のトークイベント。出演は三砂さんと往来堂の箕入さん。本の世界がある種の曲がり角を迎えている時期だけに、本書にはこれからの本屋を考えるヒントが詰まっていると思う。トークでは、箕入さんが奈良さんの言葉から必死に何かをつかみ取ろうとしている様子が伝わってきて、ちょっと感動した。

後半で奈良敏行さんがオンライン出演して、会場が湧く。奈良さんの文章は決して判りやすいとはいえないが、生の奈良さんの口から出るとなんだかスツと理解できた気になるのが不思議だ。定有堂を訪れると、近くのカフェでこういう話をたくさん聞いたなあと思いたす。自分がいかに奈良さんに影響受けてきたかを再確認した夜だった。

たまたまこの日、産経新聞に私が書いた同書の書評が載ったことで、奈良さんが過剰に私の名前を出してくれたのは照れたけど、嬉しかった。

ところで、昨日と今日のトークに両方参加したのは私

ぐらいか。古本屋と新刊書店はともに本を売る仕事だし、相互乗り入れが進んでいるが、それでも、店主も客もどこか違う気がする。それは悪いことではないし、なぜそうなのかを考えたい。

3月20日

新潟市の〈北書店〉で「新潟出直し篇」と題するトークイベント。店長の佐藤雄一さんが相手。会場で配布した資料のまえがきを引用する。

《二〇一〇年末に新潟を訪れ、〈北書店〉の佐藤雄一さんと会ってから十三年。二〇一七年秋、「新潟日報おとなプラス」のライターになってから六年が経ちました。その間、県内のさまざまな場所を訪れ、多くの人に会ってきました。いちおうの専門である「本」以外のテーマについても、書く機会が増えました。

今年二月末、「おとなプラス」が終刊しました。これまでものように頻繁に新潟に行くことはしにくくなります。そこでこの機会に、私と新潟との縁を振り返ってみようと思いました。材料として、年表、おとなプラス執筆一覧、手持ちの新潟関連本という、三つのリストをまとめてみたところ、忘れていたことも含め、多方面での関わりがあったことに気づかされました。

ここで新潟との縁は終わり、なのではなく、また違う形で続けていきたいと思えます。そのための「出直し篇」です。今後、新潟での取材、執筆、編集、トーク、ワークショップなどで、声をかけていただければ幸いです。》

会場には三十人が参加。なかには、長岡や新発田から来てくれた人もいた。私との関係も一箱古本市、取材相手、ミニコミ関係、冥土連（映画『阿賀に生きる』から生まれた活動）、RYUTIST（新潟市のアイドル）などと様々で、打ち上げではそんな人たちが同じ場で楽しく飲んでるのを見て嬉しかった。自分にできるのは、人と人との出会いのきっかけをつくるというささやかな、でも、それなりに大事なことだと思う。

北書店は、人の結節点である点で、定有堂書店とどこか重なるところがあると思う。もっとも店主の個性もあって、ずいぶんタイプは違う。定有堂の場合、ミニコミと教室が大きいが、北書店はイベントと北酒場（店内での飲み会）が軸になってきた。私が編集に関わって昨年出した『北書店の本棚』には、その記録が掲載されている。この二つの本屋に両方関わることができた私は幸せ者です。

# 主客二元論の信仰から懷疑へ（続）

— 洋上での「転向」 (四)

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人）

## 二 船に乗るまで (3)

不思議なことがあるものだ。毎週楽しみにしていた量子力学の講義を聴くたびに同じ感想を抱いていた。

私たちが大学生だった頃、多くの大学では一・二年生は教養部に属していた。そこでは一般教育三六単位、外国語八単位、保健体育四単位を最低限取得しなければならなかった。

今でも鮮明に覚えているのが、ドイツ文学の講義である。岩波文庫『変身』の翻訳者であった山下肇先生のお話に刺激されてゲーテやカフカを読んだ。カフカはさっぱりわからなかったが、「世の中にこんな奇妙なことを考える人がいるのか」と気づいたのは大きな収穫だった。

一九九一年度以降の新自由主義的な「大学設置基準の大綱化」によって教養教育は廃止された。現在の大学生は第二外国語に苦勞しなくてもよく、理系の学生たちは興味関

心のない文系科目を学ぶ必要もない。(二年前に高校を定年退職して地元大学に赴任したとき、X世代以前の化石世代に属する私は第二外国語が選択科目であることに違和感を覚えた。)

専門教育が本格的に始まるのは三年前期である。理学部の物理系学生にとって、量子力学、統計力学などは必修であった。

前後期通年の量子力学は物理学科・地球物理学科・天文学科の学生が受講する。テキストはメシア『量子力学』(全三巻、小出昭一郎・田村二郎訳、東京図書、一九七一・七二年)。一九八二年当時で九刷だから、理工系教科書としてはベストセラーなのだろう。帯には「量子力学のバイブル、最高の名著」とある。

これがとても難しいのである。第一章「量子論の起り」までは何とかなる。微視的な世界(「ナノ」サイズ)では古典力学によって説明できない現象が起こる。新しい理論が必要になったことが簡潔にしかも丁寧に記述されていく。第二章でシュレディンガーの波動方程式が登場するあたりから雲行きが怪しくなる。

参考書として読んだのが、阿部龍三『量子力学入門』(岩波全書、一九八〇年)と朝永振一郎『量子力学(第二版)』(全二巻、みすず書房、一九五二年)。今の物理系学生

はどの本で学ぶのかわからないが、私たちの頃はこの二つが入門書の定番だった。後者は名著である。

基礎レベルをクリアすれば、講義にギリギリついていけるようになる。カフカの読後感と似た気持ちになったのは、シュレディンガー方程式とハイゼンベルグの不確定性原理であった。

量子力学を学んでいなくとも講談社ブルーバックスなど理系の読み物を好む方々にはお馴染みの概念であろう。ご存知ない方のために少し説明したい。

例えば、最も簡単な構造をもつ水素原子を考えてみる。ある瞬間に電子がどこにあるかを理論的に計算するのに必要なのが波動方程式である。「何だ、そんなことか」と拍子抜けするかもしれない。しかし、方程式の解は電子の存在確率なのである。「確率？」という反応が返ってきそう。そうなのだ。粒子の位置は特定できず、存在確率しか表現できないのである。

ダメ押しが不確定性原理だ。電子の運動量(質量と速度の積)と位置を測定しようとする。常識的に考えれば、精巧な観測機器であればきわめて正確に計測できるはずである。量子力学では「運動量の誤差」と「位置の誤差」の積は定数(プランク定数を $4\pi$ で割った値)より小さくはならない。つまり、一方の計測誤差を0に近づけようとする

れば、他方の誤差は無限大に増大することになる。

粒子は確率的にしか存在しないこと。観測誤差を0にすることは原理的に不可能なこと。「そんなバカなこと私のような凡人が不思議に感じるのはまだしも、人類史上の天才アインシュタインですら「神はサイコロを投げない」と主張して、量子力学には理論的瑕疵があるのではないかと疑ったほどである。

主体が客体を眺めるとき、その都度、姿かたちが異なって見えることなどあるものか。ミクロな世界を記述する量子力学は常識を否定する。

#### 【量子力学の理解のために】

並木美喜男『量子力学入門』(岩波新書 一九九二年)  
森田邦久『量子力学の哲学』(講談社現代新書 二〇〇一年)

クマール『量子革命』(新潮文庫、二〇一七年)

ベッカー『量子力学に残された究極の問い』(筑摩書房、二〇二二年)

ドウ・ブロイ『物質と光』(岩波文庫、一九七二年)

藤井啓祐『驚異の量子コンピュータ』(岩波科学ライブラリー、二〇一九年)

## 遅い理由は分かっている

高木 善祥

(sheepsheep\_books)

前職で2、3カ月に一度、朝日新聞鳥取県版で本の紹介文を書かせてもらっていたのだけれど、とにかく時間が掛かった。以下、その理由を列挙する。

その① 本を選ぶ

先方からは特に指定はなかったので、購読者の傾向を念頭に、「いま紹介する意味がある本」を考える。純粋に自分が勧めたい本を紹介することもあれば、売れている本や売るべき本を選ぶこともあった。自己承認欲求と商売の間で悩む。会社名も入っているのに、7:3で自己承認欲求が勝つ。

その② 何冊か紹介する

これは自分に課したルールで、一つの記事内で最低2冊できれば異なるジャンルのものを紹介するようにしていた。本と本のつながりを考える必要が出てくるので、選書のハードルがさらに上がる。SNSで反応があったのは、対

話と責任をテーマにした『それで君の声はどこにあるんだ?』と『会話を哲学する』だった。ちなみにこの紹介文が掲載された時、『それで君の』はどの店にも在庫がなかった。売るチャンスと売残りのリスク、失敗はあるけど正解はない。

そして退職前に最後に紹介したのは、地方で商売をする意味を考えたくて『本屋、地元で生きる』と、時代小説の『あきない世傳』だった。

その③ 選書してから読むパターン

読み終えて「次はこれを紹介しよう!」という場合と、「いま紹介するならこれだな」と選ぶ場合があり、後者はまず読むところから始まる。読むのが早いわけでもないで時間が掛かる。選んだ本同士のつながりがうまく見出せなかったりすると、本を選び直すハメになる。

その④ メモを(あまり)取らない

付箋は貼るけど、読むことに集中したのでメモを取りながら読むのが苦手だ。いぎ書こうとすると、最初から読み直すことになる。

その⑤ 読んだらすぐ忘れる

びっくりするくらい覚えていない。付箋を貼った理由すら覚えていない。行ったり来たりしながら何度も読み直して、文章の流れをつかんで、次の工程につなぐ。問を置



くとだいたい忘れてるので、読み直す時はとても新鮮に感じられるのが唯一のメリット。

その⑥ ランダムなメモが積みあがる

読み直しながらメモをパソコンに打ち込む。本の中の会話やキーワード、自分の思い付きなど。文章の体にはなっておらず、完成する気配は全くないので不安だけが募る。

その⑦ 悩む

書き散らしたメモを色々と並び変えるが、ゴールが見えない。言いたいことはボンヤリと浮かぶが、ボンヤリなので適切なワードが出てこない。本と本とのつながりに無理があるような…？そもそもそのテーマ設定が、著者の意図するところと違ってないか…？

その⑧ 悩むパート2

とりあえず文章っぽくなったけど、言いたいことが伝わっているか…？紹介する本は違うけど、文の流れが前回と全く一緒のような…そもそもオレ…？こんな素晴らしい本を紹介して良いのか…？

仕事終わりに読んで書き、週末もまるまるつぶして、千字程度の文章に約2週間掛けていた。

ここまで書くのに約2時間。書評ではなく、書きやすいテーマで簡条書きというのはあるにしろ、自分にとって

奇跡的な短さ。

まだ読んでいる最中の『ライティングの哲学』を参考にしました。書けなくて悩んでいるとは到底思えないメンツの千葉雅也・山内朋樹・読書猿・瀬下翔太による議論と実技。素材として割り切る・散文を恐れない・カッコつけないを実践しました。次はアウトライナーを使って書こうと思います。

榎本空『それで君の声はどこにあるんだ？』岩波書店

三木那由他『会話を哲学する』光文社新書

栗澤順一『本屋、地元に生きる』KADOKAWA

高田郁『あきない世傳』シリーズ ハルキ文庫

千葉雅也ほか『ライティングの哲学 書けない悩みのため

の執筆論』星海社新書

Tak. 『アウトライナー実践入門』技術評論社

ご案内

二〇二四年五月中旬オープン予定

定有堂ビル2階で古書・新刊の本屋を始めます

sheepsheep\_books 店主 高木善祥

# ほんやづくり日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

近くの八百屋の店先に本を置いてもらええることになった。古本も新刊も並べていいという。八百屋にはどんな本を読む人が来るのだろうか。料理の本とか食べ物にまつわる本はいれておいたほうがいいのか。絵本もいいな。マンガもいいな。想像しながら本を選んでいくが、最後にはもう分からん!とごちゃごちゃとした選書になる。木箱に詰めて軒先に並べる。ネギやじゃがいもの横にごろんと並ぶ本。とても気持ちいい。本はかつこよくシユツとした本棚ではなく、ごろんとそこらへんに並んでいて欲しい。気付いたらそこにあった、くらしいのさりげなきで店の隅っこにあるのがいい。かつて本の仕事を教わった先輩のひとりが「本は嗜好品だ」と言っていたことを思い出す。映画やタバコや酒と同じく生活の余ったところを補うものだと。確かにそうかもしれない。本がなくなつて生活に困る人は少ない。どん

な人でも三日くらいなら我慢できるだろう。だけど嗜好品と切り切つてしまふよりはもう少しだけ生活に近いところにあつて欲しいと思う。「晩ごはんのおかずどうしよう」という問いの次の次の次の次くらいに「今度読む本どれにしよう」があつたらちよつとうれしい。かつて勤めていた本屋にはクロスワードやナンクロの雑誌の発売日を楽しみに待つてゐるひとがたくさんいた。どれでもいいわけではない。毎月決まつた日に出る決まつたパズル雑誌を必ず買つていく。人によつては単なるお年寄りの時間潰しにしか見えないかもしれない。けれど朝店が開くのと同時にさつき並べたとこの雑誌を大事そうに抱えてレジにやつてくる姿には、娯楽とか趣味よりもつと毎日の生活に近いなにかがある。豊かさとかいつた言葉とはまた違ふ「本を買いたい」という切実さみたいなもの。「あつてもなくてもいいんだけどさ」というひとにモノを売るよりは「どうしても欲しい」というひとに届けるほうが気持ちいい。そこに儲けがあるかないかはあまり関係ない。お金のことはちゃんと考えたほうがいいのではあるけれど。

年度末なので町内のひとたちがそわそわしている。四月からの役員を決めないといけない。ぼくは去年運動会のお世話をする係だったのであとは引き継ぐだけだ。次の当

番に当たっているひとが店をのぞきにくる。「トリーくん  
ここにはこのへんの情報が集まっているからな」「来年度も  
なにかしらたのむで」と太い声で何かを頼まれる。何をし  
たらいいかは分からない。頼んでいる本人もたぶんよくわ  
かっている。苦情を言われるよりはマシなのでとりあえ  
ずうなずいておく。「まあそうやって褒めといたらな、な  
んかしてくれるやろ」と本音も大きな声でこぼしていく。  
ウラがなきすぎてカサカサと笑うしかない。できることは  
やりませよ、と応えておく。町内の仕事は、仕事であつて  
仕事ではない。一円にもならない役割分担がここに住み続  
ける限りずっと続く。誰もがちよつとずつ持ち寄つてまわつ  
ていく。感謝されることもないし儲かることも絶対がない。  
ただ「若い」というだけでいくらかの価値はつく。価値が  
つくことがいいことなのかはわからない。本屋だから頼ま  
れるのではない。どんなひとにも仕事はまわってくる。だ  
からこそ、ここで本屋をやっている自分にできることを黙つ  
てさがしている。

「まちづくり」という言葉がやたらと出てくる集まりに行  
く。おとなしく入り口の近くに座つておく。話は聞いてい  
るのだけど、まちはわがわがにつくるもんじゃないだろう、  
今からまぢきをつくつてどうする、と心の中で思っているの

で本場の議題がなかなか自分の中に入つてこない。まち11  
をつくるってなんなんだ。まちは勝手にできるからおも  
しろいんじゃないのか、と入り口の近くの席で考えている。  
口には出さない。

六才になった息子とレゴランドに行く。レゴがいっぱい  
ある。レゴしかない。どうぞレゴで遊んでください、ここ  
がレゴの町です、と全力で訴えかけてくる。マップがあり、  
遊び方が決められた世界。ふと見上げると高速道路が走つ  
ているのが見えて我に返る。つくられたまちにしているのはな  
にも考えなくていいのでとてもラクだった。息子はつくら  
れた町の遊具で飛び跳ね滑り台を滑る。それは近所の公園  
にもあるのでは、と思う。口には出さない。

# 本を作る側から (13)

村瀬 謙介

(小取舎)

生まれて初めて一眼レフを買った。とはいえフルサイズではなく一〇年ほど前に欲しかったオリンパスPENのE PL7を、これも初めて利用するメルカリで購入。届いた箱を開けたらタバコの匂いがついていた。ぐぬぬぬ。

それより前、タウン誌を作っていた頃は撮影込みの取材もするのでマイカメラを持っていたのだが、見た目は一眼レフ風の代物だった。まあ実際に掲載されるサイズを考えたら当時でも十分な画素数だったのだが、憧れの一眼レフのシャッター音は電子音で鳴るようになっており、便利はいいのだが一眼レフの顔をしたデジタルカメラという偽物感が少し引つ掛かっていた。そのカメラは、自転車で派手にすっ転び、顔面 $\leq$ 地球が喧嘩した際にパーツというパーツが見事弾け飛んで修理も出さぬまま押し入れて眠っている。壊れたその頃には広告の仕事も辞めていたし、携帯電話のカメラの画素数も時代とともに上がってきていて個別にカメラを使うことはなかった。

時は経ち、昨年あたりからオールドコンデジが流行ってきている。ティックトックで若い世代が、昔のコンパクトデジタルカメラで撮った動画をアップし、それがノスタルジックな映像だということでも人気がある。要するにエモいということだ。少し前まではフィルムで撮った感じになるアプリなどが人気であったが、今はデジタルカメラのあの「平成」感が良いらしい。そして解像度がそもそも低いので高性能の携帯カメラでは再現できない。ニコンとかキヤノンなど、家のなかを探したら二、三個は出てきそうな古いコンパクトカメラが高値で売買されている。ということの家を探すと出てきた。キヤノンのIXY。これで写真や映像を撮るといい具合に画質が荒く、今を切り取っているのに懐かしいという不思議なギャップが生まれて面白い。

さて、それでオリンパスPENの話に戻るのだが、出版物制作や宣伝材料に使うためということもあるが、実は第一子が三月に生まれまして。子供の写真はSNSなどどこにも出したくない派なのだが、記録はしておきたいと思ひましてね、ええ。フルサイズのちゃんとしたお高いカメラを買おうと、村瀬の性格上こだわってしまいそう。「あのレンズもこのレンズも欲しい」とか「照明とかも欲しい」

となつてしまふのが目に見えている。これ以上、深みにはまるような趣味を増やしてはいけない。よつて、適度なデータサイズで保存でき、軽くて気軽に撮りやすい安価なこの機種を選んだ。それにスマホに画像データが飛ばせるし便利が良い。

出版社をやっていると自分で本を買つたりするほか、本をいただく機会も多い。ちゃんと私が読みたそうな本を譲つてくださるし、実際興味がある本ばかり。なのになかなかその本に手をつけることができないという状況。読みたい本があると同時に、新しい本や興味深い情報が次々とリリースされ、昨日も四月に決まる本屋大賞ノミネート作を買つてしまった。まんまと出版社や書店の戦略に乗せられている……。そんなこんなで棚一段々二段分は未読本で埋まりそう。

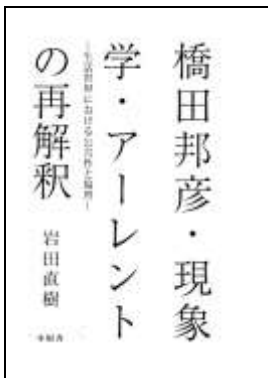
書評家の永田希さんが二〇二〇年に発刊した『積読こそが完全な読書術である』を読むと（この本を先に読んだことと自体矛盾しているが）、『ビオトープ的積読環境』という言葉とともに、読まれないでおかれるものであることも書物の本質だということを紹介している。つまりは、ハードディスクとして身体の外部に情報のビオトープを作る。

このことを踏まえると必ずしも本は読まなくても積めば良いのだそう。逆説的な読書論。そう考えると未読の本たちに対するうしろめたさが少し消えた気がする。

情報がソフトもハードも次々と湧いて出てくる現代社会。まだ聴いていない音楽、まだやっていないゲーム（積みゲー）、チェックしているがまだ観ていない映画などメディアは様々なジャンルにおいて積まれている。

発信するための撮影ではなく記録としての撮影、これも積んでいるデータということなのだろうか。

とにかくその時買いたい本は、結果読まなくてもいいから買ったらいと思う。



## 汽水のほとりから (37)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

松本薫さんの小説『火口に立つ。』を買い求めて読んだ。

この本の発売にあわせて米子市内で出版記念会があると誘われてから、ひと月が経っていた。誘って下さったのは、米子市在住の写真家、庄司丈太郎さん。御自宅に知り合いの講師を招いて、今井書店グループの永井伸和氏をはじめ米子の文化人の集まりといった趣のある勉強会を定期的に催しておられる。昨年私も会員になり、初参加したのが縁で誘って下さったのだ。松本さんも会員で、参加当日に近刊の予告を手渡された。それが『火口に立つ。』だった。

ちなみに、その日の講師は安来市加納美術館名誉館長の加納佳世子さん。フィリピンの日本人戦犯釈免に尽力した画家加納莞菫(かんらい)の娘として現在もフィリピンと交流し、平和教育活動に取り組んでいるという話だった。そのこともあり、そのひと月ほど前、私は「安来市平和のつどい」開催にあわせて加納美術館を始めて訪れた。折し

も館内では画家の四國五郎の展覧会が開かれており、彼の作品に心酔した女優木内みどりが晩年ライフワークとした五郎制作の紙芝居「おこりじぞう」の読み聞かせや、彼女の生前最後の仕事となった五郎と被爆死した彼の弟の日記の朗読の録音を耳にできたのも望外の喜びだった。

そんなわけで、庄司さんのおかげで多くの学びの機会を得たが、『火口に立つ。』のことはしばらく忘れていた。ところが、先日よく立ち寄る倉吉市内の書店にその新刊が平積みされているのを見て手にとり、今まで買わずにいたのを後悔した。本の帯に元米子市立図書館司書の大野秀と文藝評論家の桂秀実の推薦文があるのを目にしたからだ。大野氏は司書になる以前は今井書店に勤務され、思想書の仕入れを担当されていた県内屈指の読書家である。一方、桂氏は、前も書いたように、全共闘運動について語る辛口の論客であり、お金を積まれて書く人ではない。要するに私はこの二人の推薦文に心を強く揺さぶられたのだった。

『火口に立つ。』は、鳥取県の根雨に生まれた生田長江とその時代を描いた小説である。長江は翻訳家や批評家として知られるが、総じて思想家であろう。彼は小説や戯曲も書いたが、それも思想を伝えるためであったと言える。ただ、彼は初め西洋の近代思想を唱えたが、後に超近代を説くようになった。この小説中に「超克」の語はニーチェ

を翻訳した際に長江が発明したとあるが、まさにその語を用いた「近代の超克」というアポリアには、西田幾多郎や橋田邦彦など、東洋思想にも造詣が深かった戦前の日本の近代的思想家の多くが魅せられてきた。小説を読み終え、長江はその先駆であり、典型だったと感じた次第である。

とはいえ、この小説は長江の評伝ではない。確かに版元は「小説「生田長江」を出版する会」とあるから、そこが著者に長江の小説の執筆を依頼したと思われるが、著者が敢えて長江を主人公としなかったところに本作の成功の理由があるように思う。似たような経緯で執筆された前作『ぼんとう』と比べると、いっそう強くそう思う。前作は晩登豊田太蔵の評伝としては成功しているかもしれないが、架空の人物を描く場面が少なく、それが小説としての面白さを半減させていた。それが本作では、架空の人物のそれぞれの人生模様が筆を費やして存分に描かれている。

思うに、長江の家にお手伝いとして住み込むことになる架空の主人公、南原律は著者の分身だろう。彼女の人生を通して、著者は長江が生きた時代を生き直したのである。この時代、多くの日本人が思想を武器に日本を変えようと闘った。長江もその一人であり、むしろ若い彼らを導き、援助するリーダー的な存在だった。女性解放の魁となった『青踏』の出版を長江が後押ししたこと。この事実が架空

の主人公を生んだだろう。長江を取り巻く著名人も数多く登場する。小説に描かれた彼女らの生き方を見れば、当時はまだ近代思想が著者の希望の星として輝いていたことが分かる。女性のみならず、癩病患者や朝鮮人など、近代日本においてマイノリティの側にいたあらゆる人々への目配りを怠らぬよう著者は時代を丁寧に描いている。

ところで、推薦文のことだが、地元の大野氏はともかく、関東在住の絳氏がなぜ書いたのだろう。その謎は、著者の松本さんが巻末に参考文献として挙げている『人間の解剖はサル』の解剖のための鍵である』（ちくま文庫）の著者吉川浩満の「米子のふたつの夜―李さん、絳さん、レフト・アローン」（『絳秀実コレクション』Bientprint 所収）という文章を読んで氷解した。吉川も米子の人だが、絳氏は学生時代の友人の李さん兄弟が米子市在住だったことが縁で松本薫さんとも親しいのだという。彼にとって米子は特別な街なのだ。二〇〇五年、絳氏を招いて彼の出演作『LEFT ALONE』の上映会を米子で開いた際、尽力したのは松本さんと当時司書の大野氏であったとのことである。

## そしてカブ主になる

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

つい最近、カブ主になった。

「お前、近ごろの株高で欲が出て、ついに新NISAでも手を出したか」と思われるかも知れないが、あの株ではなくカブ、である。

本田宗一郎が生んだ世界のベストセラー、ソバ屋さんの出前のアシ、新聞配達の心強い味方、法事に回る坊さんのゾウリ代わりとして愛され続けるホンダのCUB。

ちなみに本物の株は、森永卓郎氏も萩原博子氏も「ゆめゆめ老後の金を新NISAなどに投入してはいけません」と警告していて、個人的には全く興味がない。

予兆は、半年以上前からあった。「音信不通」第八十四

号(23年7月10日)で書いた「『雨はこれから』を読

む」。新聞社の後輩だったH女史が、ある時、愛車のカワサキW650に乗ってわが家にやってきた。

「これ、東本昌平のコミック『雨はこれから』(モーターマガジン社刊)です。主人公がSRを大事に乗っていて、これは萩原さんに読ませたいと思って」

実は、四半世紀近く乗り続けたヤマハSR400を「もういい歳だし」と手放した後、転倒のリスクも考えて、終(つい)のバイクにピアジオの三輪スクーターを選んだが、車重が重くてなじめず、単身赴任先の東京で故障したこともあって、これも手放した。

「もうバイクはおしまい」。ヘルメットやゴーグル、皮のライダーズジャケットをバイクに乗りたいたいという女の子にあげて、十六歳から始まったバイク人生に、自分としては完全に区切りをつけたつもりだった。

ところがこのコミック『雨はこれから』が、眠っていた心呼び戻してしまった。

主人公は人生に少々疲れ、テレビ局を五十七歳で辞めた男。仕事や世間のしがらみから逃れ、独り気ままな人生を選んだつもりだった。なのに、「自由だの、自分らしく生きる、などと」「このいらだちは何なのだ」「六十近くなっ



て未だになにがやりたいのか、わからないでいる」とブツクサつぶやきながらSRを走らせている。

主人公の姿がどこか自分に重なった。「何をやってもいいし、何もやらなくてもいい」。それが定年後の日々だ。E・フロムの『自由からの逃走』ではないが、退職で降つてわいた自由な日々は、当初は喜びだが、つかみどころのない毎日にいらだちや不安も覚えるようになる。それにあらがうようにバイクに乗り続ける熟年ライダーたちを、主人公は「彼らは戦っているのだ」と作中で語る。

バイクはもう歳だから、なんて人生に自ら白旗をあげているようなものかも知れない。「いまさらながら、年甲斐もなく、また始めました」というのもアリでないか。そう思うと、なんだか少し楽になった。

◇ ◇ ◇  
それと、これも「いまさらながら」だが、You・Tub  
eをよく観るようになったこともある。

自分で改造したタウンエースに50ccの原付バイクを載せ、車中泊しながら全国を旅する女子（コップ・チャンネル）、愛車はカスタムしたSR、バイクや四輪の旧車の魅力を語り、ガレージを建てる会社まで立ち上げた女子（愛車のある生活）。

昔は「バイク野郎」「冒険野郎」だった。今は「バイク女子」「冒険女子」ばかり。ひと昔前には考えられなかった。でも、昔と違って若くても、女子でも、やろうと思えばできる良い時代になったということだろう。こいつは負けてはいられない（別に勝っても仕方がないが）。

◇ ◇ ◇  
というわけで3月のある日、原付二種（125cc）のハンターカブを買った。原付二種自体、維持費が安いので最近大人気なのだが、聞けば昨年1万8600台も売れた人気ナンバーワンのカブらしい。

同級生の親父さんのカブを拝借して河原で走ったのが十六歳の春で、それからちょうど半世紀。まるで「カブに始まり、カブに終わる」を絵に描いたような人生。

さて、これに乗ってどこへ行こう。高速道や山陰道みたいな自動車専用道は走れないが、燃費はなんとリッター60㍉超。ハイブリット車の倍ぐらいある。

はたしてカミさんはタンデムシートに乗ってくれるだろうか。ま、そんなことはない。「群れず、流されず」と会社を辞める時に誓ったが、同好の士を募って「カブ主総会」を開くのもまた好し、などと妙に心がはなやぐ春を迎えている。

## タイトルの妙、妙なタイトル（前）

ムラカミヒロミ

（フライング・ブックマン）

野口久光のポスター画集（『野口久光シネマ・グラフィックス』開発社）を見ていてつくづく思った。かつての洋画の邦題は洒落たものが多かった。

殊更に受けを狙った訳ではなく、分かりにくく、日本人の感性に合わない原題を、内容を暗示し、平易で、かつ観たいという気持ちにさせる題名にしなければならぬ、という営業上の必要に迫られただけなのかも知れないのだけれど。

例えば、「慕情」*Love is a many splendored thing.*である。「大人は判ってくれなう」*Les quatre cents coups.*である。「汚れなき悪戯」*Marcelino, Pan y vino.*（つまり、「野いちご」）*Der schönste tag meines Lebens.*（つまり、

今は、横のものを縦にしただけ。ある意味、正しい判断ともいえるが、表記はカタカナだから、却ってぎこちなく

音も不正確である。それなら、横文字のままでもいいじゃないか、とさえ思う。

さて、映画同様、翻訳書には原題とかけ離れたものが少なくない。特に明治期のものなど、不可思議、珍妙、大胆なものがある。

中村正直の『西国立志編』が、スマイルズの『自助論』*Self help.*であることは知られている。

黒石涙香の『巖窟王』（モンテ・クリスト伯）や『噫無情』（レ・ミゼラブル）も、今なお通用するくらいポピュラーである。流石にジャーナリストだけあって、題名の付け方が秀逸である。『死美人』『片手美人』『人耶鬼耶』『白髮鬼』『暗黒星』…、煽るわ、そそるわ。

原作探して随分と世間を翻弄してくれた『幽霊塔』は、ウィリアムスの『灰色の女』であることが明らかになっている。波乱万丈この上ない『幽霊塔』は、作家たちにも印象深かったらしく、大乱歩を始め、高木彬光や南洋一郎、西城八十など、多くのエピソードを生んだ。原著に当たれた筈はないので、皆、涙香の掌の上である。

恐るべし、まむしの周六。

森鷗外にもある。「病院横丁の殺人犯」「十三時」「玉を懐いて罪あり」「新浦島」。

「病院横丁」は「モルグ街の殺人」、「十三時」は「鐘楼の悪魔」。「玉を懐いて」はホフマンの「マドモアゼル・ド・スキュデリ」で、「新浦島」はアーヴィングの「リップ・ヴァン・ウインクル」だ。

病院横丁はいいな。横溝正史も、ちやっかり自作に使っている。ガルボの主演映画「明眸罪あり」*The temptress*。もその口だろう。

ミステリついでに、ルブランの不朽の名作『奇巖城』も、原題は『空洞の針』*L'iguille creuse*。読んでみれば、なるほどだが、題名としてはインパクトに欠ける。保篠龍緒の名(意)訳・妙題と申すべきだろう。

ある画家が自著で「ドブネルの古塔」という作品を紹介していた。ゴゴリの原作で昇曙夢の翻訳という。読んでみたくなった。

で、国会図書館を検索したが出てこない。Googleやら何やらで調べまくるが、まるで引つ掛からない。書名の方は兎も角、地名と思しい「ドブネル」が、唯の一つも網に掛からない、というのはどう考えても異常である。

これはもう、原作に当たるしかない。

粗筋から推して、多分『ディカーニカ近郷夜話』の一編だろう。全二部に目を通してみる。どうやら、「恐ろしき復讐」が、それらしくあった。

おお、作中に、ドニエプル川(ウクライナ語ではドニプロ川)、とあるではないか。

もしかして、「ドブネル」ではなく「ドニエプル」、即ち「ドネプルの古塔」の誤植(或いは著者の記憶違い)なのではなからうか。

そう考えて、国会を再検索。ありますがな。河出書房の「世界童話全集」の一冊『ろしあ童話集』(一九五二)が、それ。収録本の題名は違うし(画家は『ロシア民話集』と書いていた)、その上、地元の図書館もちゃんと所蔵しているし、とききた。ほんまによう言わんわ。

活字を迂闊に信じるな、という戒めですな。

(つづく)

## 鳥取あれこれ その九十二

内田 克彦（地域研究家）

一八七四（明治七）年一月、民撰議院設立建白書の政府への提出が、自由民権運動の出発点である。翌年二月には、各地の結社の連合組織である愛国社の創立大会が、大阪で開催された。出席者に「因幡の今井鉄太郎」の名が挙がっている。『鳥取県史 近代第二巻政治篇』の「自由民権運動の展開」の項には、「板垣退助は、翌七年郷里土佐で立志社を組織した。このとき、鳥取士族今井鉄太郎は同志としてこれに参画したと伝えられている。板垣と今井との結びつきは明らかでない」との記述がある。

さて、板垣は迷走する。大阪会議に基づき、同年三月に板垣は参議に復帰するのであるが、一〇月には辞職してしまふ。一八七七（明治一〇）年二月からの西南戦争を経て、板垣は愛国社の再興を図ることとし、再興趣意書を携えて全国遊説させた植木枝盛らが五月に来鳥、このときのことを『日記』（『植木枝盛集 第七巻日記一』）に詳しく書いている。

廿八日 朝今井鉄太郎を問ふ不在、共立舎に行き之に

会す。〔略〕

廿九日 〔略〕午后今井と会するの宿約あり之を訪ふ不在、夜再訪又不在、共立舎に行き之に会し、他二人と岡崎可観の宅に行き談話。

三十日 〔略〕十二時湯本文彦を尋ぬ。夜飾磨（鹿野、のこと）街道海老屋に行き今井鉄太郎と会す談話  
卅一日 岡崎可観に書を残し置き乗車、旅舎を発し今町にて今井に至り〔略〕

その結果、翌年五月の愛国社再興会議には、「鳥取共立社の坪内元暁（興）、岡島清潔（正潔）。」が出席した。翌年三月の第二回会議には「因州共立社の岡島清潔、」が出席、鳥取共立社の分担金は、土佐立志社の六円五〇銭に次いで二番目の四円三〇銭である。一二月の第三回会議には、「鳥取共立社の坪内元暁、」が出席している。

さらに、一八八〇（明治一三）年三月に開催された、愛国社第四回会議は、「愛国社の名を革めて国会期成同盟と為し」たものであったが、「島根の岡島正潔、石原常節、」が出席して、「国会を開設するの許可を上願する書」が議論され、一八八〇（明治一三）年四月九日に会を終えている。片岡健吉、河野広中によって提出された成案には、

「共應社総代」岡島正潔と「右代印 片岡健吉」とある。「有志者二二〇名総代」石原常節の名が挙がっている。一月に、新たに東京で開催された国会期成同盟第二回会同には、「共立社四〇〇七名総代」坪内元暁の名が挙がっている。

ところで、鳥取県は一八七六（明治九）年八月に島根県に併合されており、消滅していた。このため、鳥取県再置運動が起きていた。『県史』には次の記述がある。

政府の政策の批判・攻撃が公衆の面前でできるといふのは、民権思想の普及・国会開設の声を大きいものにした。ただ鳥取県の場合、そこに特異な問題が付随した。それは鳥取県再置問題と自由民権運動とが結びつき、しかもそれが啓蒙されないきわめて頑固な士族の手によって推進されたことである。

自由民権百年全国集會実行委員会委員長遠山茂樹の編集による『自由民権運動研究文献目録』（一九八四年、三省堂）があり、内藤正中島根大学教授が鳥取県を担当しており、次の記述がある。

鳥取県の自由民権運動の本格的な研究は、これからと

いってよい。〔略〕

鳥取県の再置運動は、自由民権運動と時期的に重なっており、県民世論を結集するには絶好の目標であったにしても、本来的な事由と民権の主張と、どのようにかかわりあうかが積極的に明らかになることが重要な課題といえる。また、そうした研究のなかで、共立社、共斃社、愛護会などの政治活動と、民権運動家とされる人物についての再評価も要請されることになる。

この記述から四〇年、研究が進んだ気配がない。

因みに、『鳥取県大百科事典』（一九八四年）には、岡島正潔と石原常節が立項されている。

石原常節 新聞人、自由民権運動家。〔略〕一八八〇年（明治一三）二〇歳の時、『鳥取新聞』を發行、主筆となり、自由民権運動、鳥取県再置運動の中心となる。〔略〕

『新修鳥取市史第五卷』によれば、『鳥取読売新聞』を改題した『鳥取新聞』は一〇月一六日付で一旦休刊し、石原常節主幹で一二月一五日付で再刊された、としている。

（以下、続く）

二〇二四、三、二四

# 八代日記

(四十六)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

二月某日

福岡県田川市にてライブ。午前中は出勤せねばならず、いちど八代に南下して労働。何とかある程度片付けて、残りには人に託し、昼過ぎに八代を出て田川に向かう。

早起きしたので運転中に眠すぎて妻に電話。雑談をしていたら何とか目が覚めてきた。高速を降りてから山を抜ける感じの下道を走る。北九州ナンバーのクラウンが後ろから来ていて、少しおっかなかった。2時間40分ほどで田川に到着。

現場近くに車を停めて、ダイヤモンドムーンというライブハウスに歩く。入り口に悪そうな人たちがたむろしている。「こんにちは」と挨拶したが、返事してくれたのは前回福岡市にて共演したDJの上田さんだけだった。やさぐれ方が皆とてもいい感じで興奮した。

会場に入ってPAと思しき方にも挨拶したがまたうまくいかなかった。俺の「こんにちは」の言い方が悪いのかも知

れない。もしくは僕の出立があまりにもサラリーマンくさく、なぜここにと訝しんでいたのかも知れない。メンバー到着までチューニングしたり缶コーヒーを飲んだりして待つ。

メンバー到着後に主催のテツさんも来て和む。PAさんもとてもいい調子でリハーサルの音響をやってくださり、だんだんと打ち解けてきたような気がする。田川は炭鉱街だったとのことで、いい意味での不良が多い街だと聞く。みな怖そうだけど、笑顔が清々しいし、ベタベタしない感じがとても良いなと思った。

最初の出番がテツさんのバンド、クロトワ。テツさんのアコギと上田さんのマウンテンダルシマー、もう一人がエレクトリックアンプライトベースのインストバンド。普段面白いことばかり言おうとするテツさんのシリアスな演奏は素晴らしい。この3つの楽器の編成も素晴らしい、どこにもないアンサンブルだった。上田さんの演奏には迷いがなく憧れた。自分らの演奏は、どうだったか忘れてしまった。その前に出たオオクボTさんの印象が強すぎたせいだと思う。

打ち上げに「土筆」というスナックに連れて行ってもらった。なんとジュークボックスが置いてあり、7インチを皆で聴きまくる。僕と杉浦はビートルズの「ユー・ノウ・マイ

ネーム」が気になって仕方なく、やっと聴ける順番が回ってきた時は興奮して踊った。

その後、泊めてもらいに行ったテツさんの家が凄すぎた。凄すぎて上手く書けない。家の裏山にお父様の作った庭があり、真ん中に「絆」と書いた大きな石が据えられていた、とだけ記しておく。

翌朝、テツさんおすすめのおうどん屋に連れて行ってもらった。田川の面々の心のように透き通った出汁が優しすぎて染み渡る。寄った韓国雑貨屋のキムチを買って帰ったが、美味すぎた。またそれだけ買いに行きたいくらい。田川大好きになりました。

二月某日

田川の翌日は熊本にてライブ。熊本は住んでいるにも関わらずあんまり友人もおらず、何度も演奏したことがあるわけでもないので雰囲気としては少しアウェイ。しかし、ブッキング兼PAのジュン君が奔走してくれ、充実の対バンで盛り上げてくれた。特に若者たちのバンドは演奏がうま過ぎる。うまい上にバンドの音像が完成されていて、自分らの出音が少し恥ずかしい。

初っ端のサマリー氏はドイサイエンスというバンドの主催者。彼の弾き語りがとっつきやすいのと狂ってるのがま

ざくりあって素晴らしかった。

熊本では演奏ミスへの強迫観念が他所で演奏するより強い。(いいかつこいしいなだけだと分析している)が、今回は開き直って演奏してみた。結構良かった気がした。サマリー氏とジュン君に終演後ほめてもらったので、良かったのだろう。録音を聞き直しても悪くなかった。ついに地元での何だかを克服できたような気がする。

二月某日

名古屋のブラジルコーヒーにて「ケバブ冬のジョンソン祭り2024」。名古屋ツーデイズ。初日がワンマンライブ、二日目がピラミッドと、フランスからの Manuel Bienvenu Band との共演だった。ブラジルコーヒーのボス、ピラミッドのメンバーでもある角田さんの企画。昼頃名古屋について、和菓子屋チェックと後はひたすらゲームして入り時間まで時間をつぶす。

ワンマンの前座にムルヒバンド。会場を温めてもらう。我々はツーセットにして、計25曲演奏した。熊本の演奏の調子よさを維持し、中弛みなく演奏し切ったと思われる。熊本や東京よりもホーム感。なぐあ氏によるオープニングからクロージングまでの選曲を最高であった。

つづく。

## 「身の丈」を考え始めてしまった人

『町の本屋という物語』を読んで

三浦 永理

（青翔開智中学教員）

定有堂に入り浸っているせいかな、鳥取に来たせいかな、最近「身の丈」という言葉がしっくりくるようになってきた。

『町の本屋という物語』の「本屋の未来を想像する」の節において、開業当初は「大きな書店に成長する、という選択肢もあった」と奈良さんは語っている。そして、結果的に本屋の周囲一・五キロ、ないしは本屋に訪ねてくる人との「身の丈」の範囲に「縮小」していった。

「町の書店に未来はあるか」にはこうも書かれている。

「身の丈」でしか考えられないので、絵図的には描けないし、あまり興味もない。課題を先送りしないで、一つ一つ解決していく。自分にできない課題は抱え込まないし、背伸びしない。わたしは今楽しいか、いつもこう問いかけてたい。したいことしかしたくない。これってちよつと違うけど、でも独立自営の入り口ですよな。」

自分は「身の丈」以上の何かに憧れている人間だった。そうでなければ、エンタテインメントの世界には憧れなかつ

たし、そんな仕事を志すこともなかっただろう。私には確実に社会を変えたい、マスに影響する仕事をしてみたい欲求があった。マスコミの世界だ。ただ、肥大するイメージの氾濫を商売にする世界に少しずつ違和感を感じた。隣にいて働いていたはずの俳優が、渋谷の交差点で引き伸ばされた姿で私たちを見下ろす。まさしくアイドル（偶像）だった。仕事を辞めて流れついて、今は鳥取にいる。

教育現場に来る人は、この辺りが曖昧なのだ。「身の丈」の範囲でやることに、つまり目の前の子どもに関わることにこだわりながら、彼らは行政や組織の一部に取り込まれている。「目の前の子どもたちに関わり、より良い未来を考えたい」と思うからこそ、それがより大きな組織・物語に巻き込まれていく場合もある。体系だったカリキュラム、行政から来る学習指導要領などなど。目の前の子どもだけでなく、巨視的に未来を見据えることが、教員にも求められている時代だからこそかもしれない。

一方で、組織化することではか得られないものもある。隼ラボで、『山の上のパン屋に人が集まるわけ』を執筆した「わぎわぎ」代表の平田さんのイベントがあった。彼女はパン屋の代表で、今は「わぎマート」というコンビ



二形態の店を拡大しようとしている。

最初、平田さんにとつて、「わざわざ」は起業ではなかった。「D」の夢に挫折し、「できることをやろう」と長野で始めたパン屋。その中で、自分一人できなくなつたことを回していくために、仲間を募り、会社にしていった。「身の丈」を超えたシステムを維持するために、転換を迫られたのだ。

拡大を目指すか、縮小を目指すか。方向は違う。それでも、最初の種は「身の丈」のところにあったと思う。

かつての知り合いの多くが、それなりの大学も出ているので、大きな夢を抱いているように思う。あるいは、社会からの要請通りに家庭も仕事も全てをうまくこなそうとしている。中には、自分の体力のギリギリまで頑張っている人もいるし、無茶をして自分を奮い立たせている人も多い。今の二十代も、そんなにゆとつていないのだ。「よくやるなあ」と年上のように達観してしまう。

ひとえに達観してしまうのも、自分が後の残りの半世紀近い人生を潰瘍性大腸炎と共にいるとわかっているからで、引越すするにも、転職するにも、病院ありきとなつてしまふからだ。「身の丈」に合わせよ、縮小せよと体から命じられている。いろいろできる人がうらやましいし、もうそ

こには戻れない。諦めを覚えた一年だった。

一方で、そこまで自分の身を顧みたときに、やはり諦めきれない「したいこと」が出てきた。あれもこれもやりたいと思っていたことは全て難しく感じられたけれど、この最後のひとかけらが自分の進む方向かもしれないと希望を感じられる。それが私の「身の丈」にあった希望だから。今私が受けている治療は「身の丈」にあったものではなく、かなり高額なものだ。これは、健康保険というシステムによって支えられている。

一方で、私が志向する方向は「身の丈」へと変化している。自分でできること、やりたいことの究極へ舵を切ることもあるかもしれない。自分の身の回りから何かできないか、とその種を探し始めている予感がする。

「身の丈」を一回考えてみると思うよ。

まあ、東京じゃそんな風にはやってたら、モブキャラか。でも、忘れられるくらいがちょうどいいと思うんだ。

拡大するにもあんたの身が持たなきや意味ないしね。なんて思つて、私は君を見てる。

と届かない手紙を送る。

# 春のあんじ

あきの素生

(くうねるめがね)



「彼岸の小鳥殺し」という言葉を久しぶりに思い出した。一月、二月と、暖冬と騒ぐほどでもない、かといつてそんなに雪も降らない、このところのありがちな冬といった感じで、三月に入ってから、日が長くなったこと以外、季節の移り変わりに思いを馳せることもなく、真冬と同じダウンコートを着込んで平坦に過ごしていたが、突然の暴風雪に冒頭の言葉を思い出すくらいには、春を認識していたようだ。

このお彼岸には、ぼたもちを食べた。ぼたもちは好きだ。家で手作りのぼたもちが出てきたことは記憶の限りないのだが、祖母の家で、親戚の家で、特別な日とかではなく何気ないタイミングで、ふるまわれてきたおやつだ。今では、スーパリーの総菜コーナーで見つけて、心の琴線に触れたときに買って食べる。外側があんこのものと、きなこのものが両方入っているものを選ぶ。時間によっては、このぼた

もちを一食とすることもある。日本茶でいただくのも、コーヒードいただくのもいい。

庶民的な一面がありながら、季節によって名前が変わる(という説がある)ところも心憎い。春のぼたもち、秋のおはぎ以外に、夏の夜船、冬の北窓という呼び名があることを、先日たまたま読み返した漫画で知った。名前を変えながら、一年中食べられるということは、それだけ親しまれている和菓子証しでもあるだろう。

春の「餅系」和菓子の中で、一番好きなのは柏餅だと思う。思う、というのは、昔であれば何の迷いもなく一番と言えたのだが、いろんな和菓子を知り、味覚も変わって、おいしくいただくことができるものがぐんと増えてきたからだ。子どもの頃は、あんこよりクリーム、なんだつたら、ポテトチップスみたいなスナック菓子のほうが好きだった。桜餅は、色合いのかわいらしさには惹かれつつ、少し独特の風味が苦手で、選ぶことができるのであれば、柏餅を常に通に選んだ。今では、その風味も塩漬けの桜の葉もおいしいと思えるのだが。

田植えの季節は、家族で父の実家に帰り、父は農作業を手伝った。私たち子どもは、何かしらをしてころころと遊び、農作業の休憩時間になると、大人に呼ばれて車に乗

り込み、父たちが田植えをしている田んぼへ行った。休憩用のおやつに持っていくのが、葉っぱにくるまれたあんこ餅だった。その葉っぱが柏の葉だったかわからない。田植えに帰るのは年に一度くらいで、そう何度も食べていないと思うのだが、外で食べるその餅がたいそうおいしく、時が経つにつれて断片的になつてくる記憶の一部として、しっかりと刻まれている。柏餅が好きなのは、この思い出の影響が大きいように思う。

今でも変わらず「あんこよりクリーム」なのは、鯛焼きや大判焼きである。あつたかいカステラ生地にも、やさしい甘さのカスタードクリームがよく合う。もみじまんじゅうも然りだ。

それらと似た味わいのどら焼きでは、クリームというのをあまり見かけない気がする。代わりに、ということでもないが、「あんバター」という魅惑の組み合わせが、どら焼きにはある。糖と油をこよなく愛する身としては、このどら焼きを捨て置くことはできない。特に小倉トーストを食べて以来、あんバターにはまっている。以前はいちごジャムとマーガリンの菓子パンが大好物だったが、今ではあんこに軍配が上がる。小豆の体によきそんな印象が罪悪感を少し打ち消してくれるのも、あんこを選ぶ理由のひとつだ

ろう。

四月四日は「どらやきの日」で且つ「あんぱん」の日なのだそうだ。「どらやきの日」に関しては、米子市にある丸京製菓株式会社が制定したものだという。おみやげ用に買って、幸いなことに自分も口にすることができた「鬼太郎どらやき」はとてもおいしかった。

クリームやバターが好きでも、ふとしたときに、あんこのやさしい甘さやなつかしさに引き寄せられる。そのほっこりとしたイメージは、小鳥舞ううらかな春にびったりかもしれない。

イラスト あきの素生

牡丹餅



お萩



夜船



北窓



## 二 案内



ドラマメリア (座敷わらし)

定有堂教室「読む会」 (講 岩田直樹氏)

4月25日 木曜日 19時から

テキスト 今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』中公新書  
会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

4月2日 火曜日 19時から

テキスト 木田元『現象学』 岩波新書  
会場 とりぎん文化会館 第6会議室

定有堂教室 「読書室ヒオトープ」小説を読む会です

4月18日 木曜日 第10回 19時から

テキスト 吉田 知子 「お供え」

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

太極拳教室 (葉香クラブ) 会場 二力所

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時から 市役所 麒麟スクエア

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員 (ナラ)

三段 公認B級指導員 (みちる先生)

定有堂教室案内サイト

(@ドラマメリア)



・編集後記:

三の丸の守りを固めた四年間が終わり、春とともに山を下り  
ます。四年ぶり二回目。なんだか高校野球のようです。

ドラマメリア (編集長)

三月六日発売『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』

三砂慶明さん編集。三月一六日(土) 角田光代さん毎日新聞に

て書評。三月一七日(日) 南陀楼綾繁さん産経新聞で書評。お

かげさまで三月二六日、重版決定となりました。

奈良敏行 (発行人)